平成２６年度　環境科学院　修士論文内容の要旨

「自然観光地で科学的情報が人々の感情・行動に与える影響」に関する質的研究
―星野リゾート・トマムの雲海テラスを事例として―

北海道大学大学院　環境科学院
環境起学専攻　実践環境科学コース
古家　衣梨

自然は、多くの人々にとって魅力であり、国内観光客でも「自然のゆたかさ」を決め手として国内観光地を選定する人は多い(㈶経済広報センター, 2008,2010)。自然観光地の中には、訪れた人々にその土地の自然をより知ってもらうための案内板やパンフレットなどが整備してある観光地も多くみられる。さらに、近年注目を集めるエコツーリズムでも自然解説を行う「エコツアーガイド」と呼ばれる存在が重要な役割を果たすことが言われている（広瀬, 2006; 敷田ら, 2008）。このように様々な情報媒体を通して、その土地の自然に関する情報が利用者に提供される一方で、情報を受けた利用者の感情・行動の変化に関して研究されたものは極めて少ない。

北海道占冠村星野リゾート・トマムにある「雲海テラス」で調査を実施した。2014年は約11万人が訪れた。2010年から北海道大学が調査研究を行っており(中村ら, 2011)、雲海発生頻度や雲海の分類、発生メカニズムなどが明らかになっている。これらの知見をテラス利用客に伝える雲海カード（古川, 2014）をはじめ様々な情報媒体が整備されている。

雲海テラス利用客が雲海に関する科学的情報をどのように利用し、それが利用客自身の感情や行動にどのように影響するのかを明らかにするため、比較的オープンなインタビュー形式の聞き取り調査を行った。また、テラス利用客の全体の属性を知るためにアンケート調査も行った。聞き取り調査は、2014年6月10日～10月27日の間の計28日間で、129組283名の利用客に調査を実施した。アンケート調査は、2014年8月30日～9月4日の計6日間で、2249枚を回収した。

以上より、利用客のテラス体験の感情・行動の傾向を捉えると同時に、それらに対して雲海に関する科学的情報（以下、雲海情報）が影響を与えることが分かった。雲海テラス利用客は、テラスに来る前に「きれいな雲海」のイメージを抱いており、そのイメージと比べながらテラス体験をしている。「きれいな雲海」発生時は、多くの利用客はイメージ通りなので喜ぶ。その際、雲海発生頻度の情報を知ると、今見ている風景が貴重な風景であることを理解する。さらに喜びが増す傾向にある。「きれいな雲海」ではない時は、イメージと現実の風景の違いから疑問を抱く利用客が増え、その結果、雲海に関する科学的情報がより求められる傾向がある。例えば、トマム産雲海や悪天候型雲海発生時は、雲海の分類情報を知ることで、今見ている雲が「雲海」であることを認識できる。その上で、雲海が見られたことを喜び、テラス体験を楽しんだり、「きれいな雲海」ではないことを残念に感じたりする。また、雲海が発生していない時は、雲海発生頻度の情報により、雲海が見られず残念だが「仕方がない」と納得を示す傾向がある。

また、「雲海を見る」目的でテラスへ訪れていても、その全員が雲海情報に興味関心を示すわけではない。興味関心を示さない利用客は、自ら進んで雲海情報を利用しようとしない。しかし、そのような利用客にとって、テラスへ来るまでの間やテラス体験中の「手持ち無沙汰な時間」は、雲海情報に触れる機会となっていることが分かった。